

第2群－3

患者の意志決定を支える看護の基盤

○畦地博子（高知女子大学看護学部）
藤田佐和（高知女子大学看護学部）
阿部淳子（高知女子大学看護学部）
中野綾美（高知女子大学看護学部）
宮田留理（元高知女子大学看護学部）
青木典子（高知女子大学看護学部）
野嶋佐由美（高知女子大学看護学部）

1. はじめに

患者の権利やインフォームドコンセントの考え方が我が国に導入されて、従来の看護とは異なる考え方や姿勢が求められるようになった。すなわち、看護のパラダイム転換が求められている。このようなパラダイムに移行していくためには、看護者は、新しい知識を学習したり、アプローチを開発していくことが求められている。

この研究は、実際に看護者が患者の意志決定を支える看護を展開するために、どのような事柄を求めているかを明らかにする目的で行われた。

2. 研究方法

以下のような2段階のプロセスを経て行った。

第1段階：平成7年度の高知県看護協会の研修に参加している看護者、香川県内のA病院で院内研修参加している看護者に対して、任意の参加であることなどを説明し協力を得た。患者の意志決定を支える看護を展開するために必要な事柄について、質問紙に自由に記載してもらい、それをKJ法で分析した。

第2段階：質的研究の結果を基に、意志決定を支える看護を展開する上でさらに必要と考える事柄について5段階評価による14項目からなる質問紙を作成した。郵送法により回収された結果を、統計パッケージ HALBAU、SPSS を使用して分析を行った。対象者は、高知県にある3つの公立病院に勤務している看護者に協力を依頼した。調査の際は、十分に倫理的な配慮を行った。

3. 結果

1) 対象者

第1段階：対象者は、看護者58名で回収率94%であった。平均年齢42.3歳、平均経験年数19年であった。現在勤務をしている臨床の場は、内科16名、外科9名、整形外科7名、精神科4名、小児科2名、産婦人科3名、手術室・ICU・透析室7名、外来5名、その他5名であった。

第2段階：有効な回答質問紙として473人から協力を頂いた。対象者の年齢構成は、20歳から59歳までに至り、平均年齢は39.2歳であった。臨床経験年数は、2ヶ月から40年1ヶ月に至り、平均臨床経験数約17年であった。

2) 結果

質的な研究においては、看護者は患者・家族を対象として「知る」こと、「つながる」こと、「働きかける」ことを中心とした『看護介入』を、大変幅広い専門的

な『知識』や『能力』に支えられながら展開していく必要性を感じていることが明らかにになった。さらに『看護介入』を展開していくために、看護者としての『姿勢』のみならず、人としての『姿勢』を育む必要性を感じていることがわかった。

これらの結果を基にした質問紙による研究からは、表 1 に示すような結果が得られている。最も高い平均点が 4.314、最も低いものでも 3.636 と、患者の意志決定を

表 1 今後さらに必要なもの

(得点範囲 1 - 5)

項目	平均点
患者にあった方法で看護を展開していく技術	4.314
看護者の価値観を患者に押しつけない配慮	4.298
患者の人間としての尊厳を守る看護	4.264
人を理解するために分析力や洞察力	4.257
患者の心理的サポートを行うための技術	4.220
専門職者としての自覚	4.190
充実したカンファレンスを運営する技術	4.077
先を見通す力	4.041
患者の病状を査定するための医学的知識	4.031
感受性や共感能力	4.013
患者の問題解決能力を引き出す技術	3.998
患者の日常生活を整えていく技術	3.873
患者や家族の倫理についての知識	3.710
家族関係を調整する技術	3.636

支える看護を展開する上で、これらの技術、知識、能力、看護観をさらに必要だと考える看護者の意欲の高さが伺われる。

その中でも特に平均点の高かった 4 項目に関しては、5. 非常にそう思うと、4. かなりそう思うをマークした看護者が 80 % を越えていた。これらの項目の内容は、患者の個別性の理解と個別性にあった看護の展開技術、心理的なサポート、そして、自分自身の看護者としての姿勢に関する項目であったといえる。逆に平均点が比較的低かった 4 項目に関しては 1. 全くそう思わないから、3. まあまあそう思うまでをマークしたものが 30 % を越えていた。これらの項目の内容は、家族関係を調整する技術、日常生活を整えていく技術、患者の問題解決能力を引き出す技術などの、具体的な技術を提示した項目と、倫理の知識といった具体的な知識の項目であったといえる。これらの結果より、看護者は、意志決定を支える看護を展開する上で、具体的に一般的な技術や知識より、むしろ患者の個別性にあった看護や自分自身の看護者としての姿勢を重視し、今後さらに必要であると感じていることが伺われる。

4. 考察

宗像により、近年“お任せ”の保健医療から、消費者である患者の“自己決定”保健医療へと明らかに移行しつつあると述べられて

いる。今回の研究結果から、看護者は患者の意志決定を支えるために幅広い知識や専門的な技術、看護者としての姿勢を強化していく必要性を感じていることが伺われる。中でも特に看護者が看護職としての姿勢を重視するという傾向は、今後患者の意志を支える看護が発展していく可能性を示唆していると同時に、それが単なる理念でおわる危惧を残しているとも言えよう。今後は、意志決定を支える具体的な看護介入のあり方がさらに明らかにされる必要があると考える。